

July.2005



デカ、死す



「オビラメの会」で飼育中だった最大のイトウ「デカ」（全長118cm、雌、推定年齢19～20歳）が6月9日、飼育池の中で死亡しているのが発見された。2003年、オビラメの会が初めて人工授精と人工孵化に成功した魚で、同会に本格的な再導入事業のスタートを切らせた功労魚。突然の訃報に悲しみが広がっている。

この日、飼育担当の高橋秀邦事務局次長が発見した。日光を嫌うイトウたちの隠れ家として水中に設置したシラカバの丸太の下で、「デカ」は丸太と池底との間に身体を突っ込むような姿勢で動かなくなっていたという。高橋さんが引き上げた時にはすでに死亡していた。「デカ」は数日前に高橋さんが見回ったときは元気だった。遺体に皮膚炎などの病変はなく、事故死の可能性もある。遺体は冷凍保存され、近く北海道立水産孵化場で検視される予定。

「デカ」は2003年5月7日、蘭越町内の尻別川で釣り上げられ、その直後、オビラメの会が採卵に成功した。翌2004年にも人工採卵と人工授精に成功し、計6000匹あまりの稚魚が生まれた。稚魚たちの一部は同会のイトウ再導入事業計画に基づいて尻別川支流に放流されている。

在りし日のデカ（2004年5月7日、鈴木芳房氏撮影）

吉岡俊彦事務局長の話 高橋さんが本当に献身的に、一生懸命に世話をしてくれていただけに、今回の死亡は思いがけな

く、たいへんショックだ。しかし、「デカ」のDNAは稚魚たちにしっかりと受け継がれていると思う。彼女の死を無駄に

しないよう、会の目的達成を目指していきたい。（談）

計390万円の助成決定

オビラメ再導入事業などに

パタゴニア日本支社環境助成金プログラム、財団法人北海道新聞野生生物基金、セブン-イレブンみどりの基金、地球環境基金（独立行政法人環境保全再生機構）はこのほど、「尻別川の未来を考えるオビラメの会」への2005年度の資金助成をあいっついで決定しました。

当会が昨年からは本格的に開始した尻別川産野生イトウ個体群再導入事業の重要性などが認められ、パタゴニアから40万円、北海道新聞野生生物基金から50万円、セブン-イレブンみどりの基金から約150万円、地球環境基金から150万円（内定）の助成をいただきます。

また、パタゴニアはこれとは別に、各国店舗で2月から展開中の「World Trout T-shirts」キャンペーンで、販売したTシャツ1枚につき5ドルずつを世界の3つのサケ科魚類保護団体に寄付しており、そのうちのひとつに当会を選んでくれています。

（オビラメの会事務局）

草島清作会長の話 当会の地道な活動に対して、財団や企業からこのようにご理解と多額の助成をいただき、たいへんありがたいことです。これまでも会員のみなさんが手弁当で活動を支えてくれましたが、30年計画の第2段階に向けて事業規模も次第に拡大し、財政の安定が大きな悩みでした。イトウ復活の目標に向けて、大切にに使わせていただきます。

セブン-イレブン
みどりの基金



patagonia
committed to the cause

財団法人 北海道新聞野生生物基金

尻別イトウ個体群復活に向けて財政課題に光

尻別川イトウ保護の新たな担い手たち

流域の3つの小学校でイトウ稚魚飼育中

4月20日、倶知安町立東小学校、ニセコ町立近藤小学校・宮田小学校に、人工孵化させたオビラメ稚魚を50匹ずつ、飼育預託しました。子どもたちは自分たちで育てた稚魚たちを6月25日の放流会で尻別川支流に放流する計画です。また同

日午後からの「イトウ稚魚飼育研究発表会」で苦労や感動を互いに報告し合います。（4ページをご参照ください）

3年連続の 採卵はならず

当会は、イトウ繁殖期に合わせた飼育親魚からの採卵作戦を5月5日、倶知安町内の親魚飼育池で行ないました。

好天の下、集合した「オビラメの会」会員やサポーターら約10人の大人たちに加え、ニセコ町立宮田小学校、同近藤小学校、倶知安町立東小学校の児童と教諭、保護者ら約30人も参加。池の水門を開いて水位を下げた後、1匹ずつ網で捕獲して麻酔を掛け、身体測定と成熟のチェックをしました（右の写真。平田剛士撮影）。

飼育中の5匹のうち、3匹に成熟の徴候はなく、「チビ」（雄）から精子が出るのを確認したもの、「デカ」（雌）から卵は採取できず、3年連続の人工授精はなりませんでした。

それでも小学生たちは、はじめて間近に見る巨大な魚たちに興奮気味。解説役を務めた道立水産孵化場の川村洋司主任研究員に「どうして雄は赤くなるのですか」「麻酔が効くのは口からですか？」と次々に質問が飛んでいました。



名前	尾叉長	全長	性別	備考
デカ※	113	118	♀	卵なし
ノリカ	82	87	♀?	婚姻色なし、抱卵なし
チョースケ	?	86	♀?	婚姻色なし、抱卵なし
キンチャン	63	66	♀?	婚姻色なし、抱卵なし
チビ	88	91	♂	真っ赤、精子あり

飼育親魚のサイズなど。2005年5月5日現在（測定・川村洋司氏、単位cm）
※デカは6月9日に死亡しました（1ページ参照）。

..... 再導入河川でイトウ稚魚生息環境の復元実験開始



オビラメの会が昨秋イトウ稚魚約1800匹を放流した川（尻別川支流）で、北海道工業大学の柳井清治教授（オビラメの会会員）の研究グループが6月初旬、イトウ稚魚の生息環境復元のための実験を開始しました（写真提供・柳井清治氏）。

現場は直線化されたコンクリート3面張り区間で、昨冬のモニタリングではイトウ稚魚は1匹も見つかりませんでした。そこで、水中に土嚢やササの葉などの障害物を設置。イトウ稚魚のすみかを人工的に作り出せないか、実験で確かめます。河川を管理する倶知安町長の許可を得て実現しました。

柳井教授は「単調で均一な流れの区間に稚魚が滞留できそうな場所を150m区間で7か所つくることができました。本当に稚魚がここを選択してくれるかどうか、結果が楽しみです」と話しています。

尻別川の「ルール」について—— 草島清作

尻別川の未来を考える

オビラメの会会長

この尻別川

にかつて、自然に生まれた「イトウ釣り師のルール」があったことは、あまり知られていない。もし仲間同士なら、各人がどのポイントに入るかは当日の朝、一番のベテランがあらかじめ割り振って決める。入っていったポイントでもし別の釣り人に会ったら、先行者のラインが届く範囲には竿を出さない。はじめの1年は必ず師匠と一緒に行動し、イトウ釣りの技と同時にマナーも学ぶ、といったことだ。

私などに言わせればしごく当たり前の決まりだと思うのだが、そのしごく当たり前のことが最近の釣り人には守られていない。その恥ずかしさ、腹立たしさは数限りない。もっとも釣りで以前に、一般常識的な社会ルールすら守れないような人たちに釣り場のルールに従えと言っても、それはちょっと無理なのかもしれない。幼い時からの家庭のしつけ、学校での道徳教育など、そこまで考えていかなければこの問題は解決しないように思う。

何年前か前、NPO法人しりべつリバーネットが尻別川利用のルールづくりを呼びかけ、当会もイトウ保護管理を念頭においたルール案を提案したが、調整がつかなかったのか、立ち消えてしまったようだ。ここでもう一度考えを述べておきたい。

たとえば「イトウが棲むと言われる淵への立ち入りを禁止したら」という提案があった。ところが今日、昔のような大きな淵は河川改修によって尻別川にはほとんど皆無であり、辛うじて2、3残っているものも、砂泥の流れ込みによって、淵というより、溜まりのようになった場所が、イトウの棲息場所になっている。現在ではイトウはむしろ、河川の曲線部の外側、テトラポッドの据え付けられた深み、といった場所に棲息していて、たとえばカヌーやラフティングの人たちがそうした場所を避けて流下できるものかどうか。はなはだ疑問な

のだ。

それよりも、イトウに限らず川魚の保護を考慮するならば、産卵期のラフティング、カヌー、釣りの自粛こそ効果的だと思われる（表参照）。

「カヌーやラフティングで川を下ると、鳥の目線でものが見える」と言われるが、なぜ水の中にいる魚の目線を考えてくれないのか。魚は岸辺の葦、柳や笹の陰の、比較的水流の緩いところで幼魚期を過ごし、成長するに従って流心に移っていくものである。河川工事や道路工事などでは、産卵期に汚濁流を出さない工夫を、たとえ設計になくとも行なうべきだが、さらに岸辺の自然環境の保全にも心を砕いて欲しい。

自然保護や環境保全の運動は頑なに純粋であるべきだと思う。こういう運動は民間のボランティアでしか行なえない。官が民を動かすことがもっぱらの日本だが、環境保護は民が官を動かすほかないのである。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イトウ												
ウグイ（陸封型）												
ウグイ（降海型）												
アメマス（陸封型）												
アメマス（降海型）												
アユ												
イワナ												
オシロコマ												
フナ												
コイ												
ドジョウ												
カワヤツメ												
ハナカジカ												
サケ												
サケラマス												

尻別川棲息魚の産卵期

「国際連携を深めてイトウ保護の実現を」

米国・野生サケセンター研究員らがオビラメの会を訪問

米国の自然保護団体「野生サケセンター」の研究者らが6月10日、ニセコ町内の「オビラメの会」事務局を訪れた。

一行は同センター保全生物研究部門責任者のピート・ランド博士、サケ事業部門のブライアン・カウエットさんと、北海道淡水魚保護ネットワーク事務局長で北大大学院教授の帰

山雅秀さん、北海道新聞社の中川大介記者、また北海道大学大学院教授の小野有五さん、写真家で八雲町在住の稗田一俊さんら。ランド博士は国際自然保護連合のレッドデータブック（絶滅に瀕した種のリスト）の見直し作業に関わっており、現在は未掲載のイトウ属を一日も早くリストに載せて国際的な保護対策につなげるべく、各国の生息地を訪ね回っている。

この日は、オビラメの会の草島清作会長、阿部英治さん、大光明宏武さん、川村洋司さん、玉井秀樹さんらが一行を案内し、尻別川の野生イトウ生息地の現状を説明。その後、ニセコ町内の温泉と一緒につかりながら交流を深めた。

ランド博士は「オビラメの会のみなさんのイトウ保護に対する情熱や実践と、あたたかいおもてなしに感激しました。野生サケセンターは日本に支部を開く計画を進めていますが、今後もぜひアドバイスをお願いしたいと思います」と語った。



尻別川について一行に説明する草島会長（左から2人目）。平田剛士撮影

オビラメの会はみなさまのご支援に支えられています。
■年会費2,000円
■郵便振替02720-9-11016
■加入者名「オビラメの会」

オビラメ稚魚放流会と 稚魚飼育研究発表会のご案内

オビラメ復活30年計画に基づくイトウ再導入事業の一貫として、昨年秋に引き続き、人工孵化させたイトウ稚魚の放流会を行ないます。また、4月から稚魚を預かって校内で飼育してくれている3小学校の児童たちを招いて、稚魚飼育研究発表会を開きます。どうぞふるってご参加ください。

オビラメ稚魚放流会

【集合時間】2005年6月25日（土曜）午前10時

【集合場所】倶知安町内の尻別川本流・富士見橋右岸駐車場

【参加料】無料

【主催・お問い合わせ】 尻別川の未来を考えるオビラメの会
電話／ファクス0136-44-2472（吉岡俊彦方）

【各自ご用意いただくもの】雨具、筆記用具、昼食など。ウェーダーや長靴があると足元が汚れません。

【備考】富士見橋に集合後、数台の車に分乗して放流場所に向かいます。天気が良ければ現地でお弁当を食べます（近くに商店などありませんのでご注意ください）。稚魚の運搬などのお手伝いをいただける方は事前に事務局までご連絡ください。



イトウ稚魚飼育研究発表会

【日時】2005年6月25日（土曜）午後1時～2時半ごろ

【会場】ニセコ町民センター

ニセコ町字富士見95番地、電話0136-44-2121

【入場料】無料

【主催】尻別川の未来を考えるオビラメの会

【協力】倶知安町立東小学校、ニセコ町立宮田小学校、同近藤小学校

尻別川の未来を考えるオビラメの会 2005年度通常総会のご案内

上記の催しに引き続き、通常総会を開催します。会員のみなさまはどうぞご参加ください。

【とき】2005年6月25日（土曜）午後3時から

【ところ】ニセコ町民センター

ニセコ町字富士見95番地、電話0136-44-2121

【主催】尻別川の未来を考えるオビラメの会

イトウ保護
連絡協議会総会は
10月29日（土）
猿払村で開催の
予定です。

オビラメの会ニューズレター 第22号（2005年6月発行）

OBIRAME Newsletter No.22 Jul. 2005

- 発行■ 尻別川の未来を考える オビラメの会
- 編集■ 平田剛士
- 印刷■ クリエイト・M （北海道滝川市緑町5-3-5）
- 発送■ 吉岡俊彦
- 郵便振替■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
- オビラメの会事務局■

北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内

吉岡俊彦方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2005 Obirame Restoration Group

<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然

ニセコが好きだ

楽しんだあとは川を語ろう

御食事処・酒房

ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472

Email / itou110@estate.ocn.ne.jp